

Jane Austen 小説と ‘Improvement’

野村ヒサ

〔I〕

「登場人物が作中で成長するということは西欧近代小説の重要な特徴である。」と川崎寿彦氏は述べている。この点がJane Austenの小説には特に著しい。6篇の完成された小説のヒロインたちは、6人が6人とも作中で〈成長〉し、理性と分別ある判断で幸福をつかむことになる。つまりヒロインが*improve*するのである。しかし未完の遺稿*Sanditon*には、11章と少しという短さもあって、そういう特徴は認められず、当時流行の風景庭園の改造（海岸保養地の造成という意味も含めて）という意味での“improvement”がテーマとなっている。この‘improvement’はAusten (1775～1817) の時代に最盛期にあり‘landscape-gardening’とも呼ばれ、地方の大地主や貴族の館(やかた)で行われた。その代表格の人物Humphry Repton (1752～1818) は、‘improver’としての最初の大仕事をケント州のコプハムで1790年に行なった。後にロンドンのケンジントン・ガーデンズを改造したのもレプトンであった。その著書‘*Sketches and Hints on Landscape-Gardening*’ (1974) には彼自身が改造した多くの庭園の挿絵が掲載されている。このレプトンの名はAustenの‘*Mansfield Park*’の作中に見られる。Austenの小説のうちで、*Sense and Sensibility*を除く5篇、(*Northanger Abbey*, *Pride and Prejudice*, *Emma*, *Mansfield Park*, *Sanditon*) の中に「庭園改造」が登場する。

話が少し脱線するが、ここでBenjamin Rumford (1753～1814) と、

当時のabbeyについてひとこと触れておきたい。

アメリカ生まれのイギリス人科学者であるBenjamin Rumfordは火薬の研究をはじめ、熱の研究にも手を染め、料理法や加熱法について種々の発明をした。Austen作の*Northanger Abbey*の中に、煙の出ない暖炉が登場するが、それはRumfordの作品である。

1536年から1539年まで、ヘンリー 8 世は修道院改革と称して修道院の破壊を行なった。当時まで修道院は莫大な土地を所有していたが、ヘンリー 8 世は修道院を全部壊してその土地を自分の手下に与えた。現在でも英国じゅうのいたる所に修道院の廃虚が見られる。シェイクスピアのソネット73番の

Bare ruin'd choirs, where late the sweet birds sang.

(この前までかわいい小鳥がさえずっていた聖歌隊の席(木の枝)は破壊されて丸はだかとなり…)

もこれを歌ったものである。修道院の莫大な土地をもらった人々が新貴族となり、現在英国の各所に貴族の城の名称が何とかAbbeyとなっている。(Woburn Abbeyはその一例である。Austen小説のうちで、こうしたabbeyが登場するのは*Emma*のDonwell Abbeyと*Northanger Abbey*のティルニー将軍の屋敷の名Northanger Abbeyである。

{ II }

この章では、Austen小説の題名を次のように略称させていただく。

| | |
|-----------------------|-----------|
| Sense and Sensibility | ……(S.&S.) |
| Northanger Abbey | ……(N.A.) |
| Pride and Prejudice | ……(P.&P.) |
| Emma | ……(E.) |
| Mansfield Park | ……(M.P.) |
| Persuasion | ……(P.) |

Sanditon

…(S.)

'improvement'に焦点を合わせてAusten小説を考察すると、未完遺稿ながら (S.) が、その次には (N.A.) が論考に価すると思われる。

1925年にE.M.Forsterが (S.) 論を発表するまで、この未完遺稿は、1871年の*Memoir*に掲載された未完の小品として知られているにすぎなかった。Forsterは有名なJane Austenの讚美者であり、(S.)の地誌的な価値を早くから認めていた。彼は1817年1月末から書き始められた(S.)の人物描写が全体的には以前に書かれた小説にこだわっていると気付き、落膽した。そしてAustenの衰えゆく想像力(これもForsterの考)の原因を、その体力の衰弱のためだと考えた。1817年1月末にはAustenの病気はかなり進んでいて、2ヶ月後の3月末には原稿の執筆を断念し、その4ヶ月後に亡くなった。

(S.)を感傷的に考察すれば、私たちはAustenの創造的な快活さに驚き、生涯のうちでもっとも悲惨な時期に書かれた強烈な皮肉に頭が下がる想いである。筆致はそれ以前に書かれたどの小説よりも奇妙で、歯切れが良く、感動的である。Marvinn Mudrickの分析によれば、(S.)はその皮肉では、Austen小説の最高の部類に属している。たとえ短くて未完であり、(E.)や(P.)のエピローグのようにみえるかもしれないが、(S.)はそれ自体の進路を持った新しい作品である。41才での死の3ヶ月前に、Austenは新たな決意をもって第7番目の小説(S.)を書き始めた。(この「第7番目の小説」論はB.C.Southamが論じている。)

私たちが(S.)をAustenの後期の他の作品(とくにN.Aと)と比べてみると、この頃(1816~1817)Austenは庭園の改造に関心が深かったことがわかる。Austen流の庭園改造観は(B.C.Southamによれば)(M.P)から(S.)へと続いて居り、(P.)の「秋のような静かな成熟で終って」はいない。Austen小説は英文学史上もっともひきしまった文体を持つと言われているが、(S.)はそのうちでも異色の歯切れ良さを持ち、当時す

でショック療法が存在していたことをも物語っている。

(P.) は6人 [(S.) を入れれば7人] のヒロインたちのうちで最年長(28才)のAnne Elliotが8年前の苦い経験の後、ロマンティックな愛を成就させる物語である。(S.)ではAustenは人間性の不変の要素を描く作品としての小説の永久性を考慮に入れながら、小説の歴史的意義にも注意を怠ってはいない。1816年にAustenが(N.A.)の改訂に着手した時、すでにこの時代の推移(風潮の変化)に直面したと考えられる。1798~9年頃に書かれたこの初期の小説の原稿は、1803年以来Austenの手から離れていた。クロスビーという出版社に買い取られていたが、出版されないままで13年の月日が経過していた。理由はおそらくゴシック諷刺文学はもう読者に飽きられてしまったと考えられたからであろう。とうとう兄Henry Austenはその原稿を1816年に買いもどした。その後どんな改訂が行なわれたのかは私たちに解らないが、文体に関する限り、1816年の改訂はまさに徹底的なものだったと言われている。(N.A.)は構成上からも、性格描写の点でも、かなり単純で未推敲であったからである。しかしその一方でAusten小説のうちでも(N.A.)はもっとも欠点の少ない作品であると考え人もいる。Austenの初期の2篇の小説(S.&S.)と(P.&P.)には斑(むら)や硬さがしばしば見受けられるが、(N.A.)にはそういう欠点がほとんど無いからである。喜劇的な調子も安定していて、筆致には持続的な才気も感じられる。このことは13年も経った後の(おそい)改訂の産物に他ならない。しかしAustenはこの物語の背景を近代的に変えようとはしなかった。背景は1790年代後半のバース(Bath)であり、その頃の作法や様式が描かれている。Austenは娯楽作品としての(N.A.)の成功には自信があったが、他方、後期の他の小説とは、異って、同時代を描いていないということを読者たちに知らせたいと切望し、その趣意の'Advertisement'を巻頭に附加した。その一節に次のような個所がある。

thirteen years have passed since it was finished, and many years since it was begun, and that during that period, places, manners, books and opinions have undergone considerable changes.

憂慮の原因は二つあったと思われる。ひとつはゴシック文学の諷刺についてであり、もうひとつはバースの社交界の変化についてである。1816年になると、*Mysteries of Udolpho* (1794) (この作品の諷刺文学として(N.A.)は書き始められた)は未だかなり人気があって版を重ねていたが、それに関するジョークは新鮮さをいくらか失ってしまっていたと思われる。またナポレオン戦争(1804~1815)後に脱稿した(P.) (1815~1816)に比べてみると、バースの社交界の構造が1803年当時とはかなり異ってしまっていたこともある。

1790年代のバースは社交界の^{るつぼ}坩堝であった。誰もがみんな温泉の大宴会場に押し合いへし合いしていた。だからCatherine Morlandのような身分の低い田舎教師の娘が、大地主の息子Henry Tilneyと偶然出会うこともあり得たし、その両人が売出し中の法律家の子供たち(the Thorpes)と出会うこともあり得た。しかしその後の10~15年の間にバースは、上流階級の人々がしばしば訪れる場所ではなくなり、ジェントリー階級の人々の間でも人気落ちて、その弟子たちの配偶者探しの場所としての利点もなくなってきていた。(E.)に登場するような中流の下の人々、西の地方出身の大望を抱いた農民や、ブリストルの商人やバーミンガムの工場主や法律家や医師たちが上流階級の人々に取って代った。こういう人々はナポレオン戦争で大そう得をした社会集団であった。彼らはジェントリー階級の人々との交際を望み、その生活様式やマナーやスピーチを真似ることによって、出来るだけジェントリーの社会的地位にあやかることを望んだ。ジェントリーの中でも年輩の人々は、習慣となった季節ごとのバースでの保養を続け、旧友たちと再会した。彼らはバースに

取って代った新興海水浴場の雰囲気は好まなかったからである。そしてこの新しい世代の訪問者たちに背をむけ、自分たちだけの交際を続けた。これがナポレオン戦争後のバースであり、(P.) の背景である。

エリオット家の人々とその先輩の旧友たちはそこで生活していた。そういう場所ではキャサリン・モーランドとヘンリー・ティルニーは出会う可能性が全然ない。ジェントリー階級の人々は晚宴会場を新興階級の人々に明け渡し、自分たちの間だけで交際し、もてなし、細かい社交界の段階を守ることで、自分たちの紳士気取りの儀式を維持していた。そのような閉鎖的なサークルにおいてだったら、ヘンリー・ティルニーのような青年は、一つの集団の中で自分の時間を過し、キャサリン・モーランドはまた自分たちだけの集団を作って過すから、二人の道は出合わなかったことだろう。

(P.) のヒロイン、アンもこの問題に直面している。彼女がバースで Wentworth に会うチャンスに気をもんでいる場面に

The theatre or the rooms, where he was most likely to be, were not fashionable for the Elliots, whose evening amusements were solely in the elegant stupidity of private parties. (P. p180)

という個所がある。社交界の観察眼の鋭さ正確さは、風俗喜劇の秀れた作家であったオーステンのもうひとつの強味である。そのため (N.A.) の 'Advertisement' は時代に忠実だという自分自身の評判を注意深く守るためでもあった。だからオーステンは一般の読者たちにこの (出版年代が) いちばん新しい小説が、なぜ時代後れになっているのかを説明する必要を感じたのであろう。バースの社交界の様式の変化はイングランド全体の社交界を吹き抜けた、広範で深い変化の嵐の一部であった。

ジェイン・オーステンが生きた時代は大いなる変化の40年間だった。(フランス革命、ナポレオン戦争、産業革命) 19世紀初期の摂政時代の近

代化は産業革命に続いて起こった。この時代の歴史家や批評家たちは、この変化の過程を 'improvement' (進歩) の一過程として、楽天的に捉えた。中流の紳士階級の人々は、自分たちの時代を物質的富裕さの時代だと称した。農業についても実利的で機能的な農作法が発達し、荒地と共有地の囲い込み (enclosure) と耕作という結果となった。土地利用法の過程で、ナポレオン戦争の海洋閉鎖が、国家に農業的自給自足を強いるであろうとの恐怖から、その運動はいつそう促進された。もうひとつの田園地帯の著しい変化は (前にも述べた) レプトン式庭園改造であって、大きなカントリーハウスやその庭園で行なわれた。その一例が (N.A.) のティルニー将軍の家屋敷の改造 (improvement) である。アペイは王政復古期以前の修道院の建物だったが、それが、これ見よがしの独創的な近代建築に変貌していく。また (M.P.) にも二つの例が見られる。登場人物の一人、ヘンリー・クロフオードがサザトン・コートとソーントン・レイシーの改造に心を砕く場面である。(しかしその改造の完成した有様は読者には知らされない。) 風景式庭園の改造は、(最高の状態になれば) 神秘的で壮麗な効果を発揮した。ちょうど (P.&P.) のヒロイン Elizabeth Bennet が Mr. Darcy の屋敷、ペンバリーハウスの窓から眺めた景色と同様である。しかし 'improvement' には悪い面もあった。その時代の人々にとってその語は流行語であるり、自惚れた、はでな裕福さも意味していた。(M.P.) では、こみ入ったドラマが 'improvement' の全体的な概念のまわりで構成されている。景色の連想は食いものにされ、庭園改造業者の専門用語を利用して、そういう考えが登場人物たちの道徳的風景の中へ持ちこまれていく。メアリー・クロフオードがヒロインの Fanny Price を当惑させ、自分の大胆不敵な陰謀に Edmund を引き込みもうとして発言した批評のひとつが

Every generation has its 'improvement.' (M.P. p.186)

である。サザトン・チャペルについてのラッシュワース夫人の意見を支

持している。この小説におけるAustenの目的のひとつは、'improvement'の解釈法である。ただ新旧両世代の間だけでなく、パートラム家の人々、クローフォード兄妹、そしてヒロインFanny Priceによって代表されるさまざまな道徳的世界がどんなに多様であり、時によって矛盾し得るものかを探求することであった。1816年にAustenが(N.A.)を改訂していた頃、ティルニー将軍のまわりの'improvement'においても、脱稿したばかりの(P.)の手書き原稿においても、こういう考えはAustenにとって非常に身近なものだった。社会的地位の向上(improvement)がWentworth大佐に従男爵エリオット家の娘への求婚を可能にさせる。8年前Wentworth大尉はエリオット家やラッセル夫人に受入れられなかった。しかしナポレオン戦争後、事情が一変し、Wentworthは海軍の報奨金や英雄的地位を手に入れた。破産状態になっているウォルター・エリオット卿は、今ではもう、Wentworth大佐の社会的経済的適性を認めざるを得ない。ナポレオン戦争の結果新しい社会的序列が生まれ、ウォルター卿は自分の領地の家屋敷を海軍提督に貸し、その義弟の海軍大佐を自分の家族に迎え入れなくてはならない。ヒロインAnne Elliotの妹の嫁入り先であるマスグローブ家も、この'improvement'の嵐に巻き込まれている。

The Musgroves, like their houses, were in a state of alteration, perhaps of 'improvement'. The father and mother were in the old English style, and the young people in the new. Mr. and Mrs. Musgrove were a very good sort of people; friendly and hospitable, not much educated, and not at all elegant. Their children had more modern minds and manners. (P.p40)

新旧両世代の趣味豊かな「混乱」は冗談めかして語られて居り、語調も軽い。しかし作者自身の態度(静かな楽しみ、その後にある、さし控えられた判断)は、'alteration, perhaps improvement'という語の選択の

際の逡巡によって、読者に伝えられている。

(N.A.) から (P.) に伝わる状況は、(S.) と密接な関係を持つと考えられる。Austenは(N.A.)を最新の文体に書き直し、その皮肉にも現代的重要性を与えた。「今日の非封建的な風潮」と(P.)の登場人物の一人、エリオット氏が軽蔑をこめて呼んだものを念頭に置きながら、Austenは筆を進めている。

B.C.Southamによれば(S.)は(N.A.)の'recasting'(配役がえ)と見なすことも可能である。Austenは(N.A.)に取りかかるのに、一人の純心な適齢期の女性の社交界へのデビューの経験を辿ることで(一種の)風俗喜劇を進行させている。このヒロインCatherine Morlandと戯作的に並べられるのは(S.)のCharlotte Heywoodである。Catherineは10人兄妹の長女で、ウィルトシャーの村から出てきたばかりでありである。Charlotteは14人兄妹の長女で、はるかウィリンデンの出身である。(S.)は(N.A)の構成上のぎこちなさを少し改良している。Catherineはたった一人でバースの町で種々人物に出会い、何度も困惑する。招待されて泊まるアベイはゴシック風な逆転劇の舞台として使われている。中流の人々の集まる最新流行の保養地としてのバースの評判は、Austenの(S.)執筆の時期までに、海岸の保養地にとって代られていた。(Sanditonはsandy townから出たものと解釈できる。)当時密会や駆け落ちに好都合な場所としてブライトンがあったが、その辺りに婦女誘拐者も出没し、モーランド夫人が娘Catherineに気をつけるように告げたりもしている。(N.A.p.18)

2篇の小説のヒロインたちは、2人とも独得な先入観を持って登場する。Catherineはゴシック的な空想を、Charlotteは懐疑主義を。(この懐疑主義の原因は、父親の考え方をうけついでいることと、ウィリンデンがサンディトンから遠隔の地であることであろう。サー・エドワードをはじめ、どこか不可解な人物たちに囲まれて、Charlotteは不確実感を感じるが、この感情はCatherineがティルニー家に滞在した時に感じた深い

神秘的な不確実感と似ている。ノーサンガー・アベイは、Austen小説のすべてのカントリーハウスのうちで、その所在がもっとも精密に複雑に書かれている。当時のバースの町はヨーロッパでも有数な美しさを誇っていたが、Austenはその素晴らしさには注意を拂わなかった。Austenの目的のためには、バースの町はただ社交界の所在地に過ぎなかった。ところが、話がノーサンガー・アベイについてとなると、その位置は詳述され、意味深長になってくる。アベイの改造者 (improver) は1790年代の有名人で、ぜいたくの限りを尽くし、発明の才を発揮している。(S.)のパーカー氏は将来の大地主で商業的投機の才能をつぎつぎと発揮している「創設者」である。面白いことに(N.A.)にも(S.)にもhobby horseが登場する。もしAustenがこの未完原稿を書き終えるまで生きていたとしたら、読者はこのhobby horseのくり返しに(N.A.)から(S.)へそっくりそのまま移って来たように感じるかも知れない。

初期の小説の執筆中から、Austenは他の種類の改良(improvement)とははっきり異なって、庭園改造にだけは一抹の不信感を抱いていたようである。道徳性ある地域はimprove出来ない(とAustenは考えていた)あるいはもしかりに改造されたとしても、(P.&P.)のヒロインElizabethがペンバリーの屋敷をはじめて見た時のように、壮麗さの基本は自然である。

a large, handsome, stone building...in front, a stream of some natural importance was swelled into greater, but without any artificial appearance. Its banks were neither formal, nor falsely adorned, Elizabeth was delighted. She had never seen a place for which nature had done more, or where natural beauty had been so little counteracted by an awkward taste;... and at that moment she felt, that to be a mistress of Pemberley might be something !

(P.&P. p.245)

(E.) のEmma Woodhouseが小説の終り近くで、ドンウェル (アベイ) の見なれた景色を見渡して、新しく目覚めた興味を持って、それを眺める場面がある。

…‘the respectable size and style of the building its suitable, becoming, characteristic situation, … with all the old neglect of prospect, …its abundance of timber in rows and avenues, which neither fashion nor extravagance had rooted up … It was just what it ought to be, and it looked what it was.

(E. p358)

Austenの庭園に対する承認は、飾らない文体であるが、はっきりと読者に伝わって来る。ペンバリーの女主人になることについてのElizabethの感情、ドンウェルが相変わらず本来あるべき姿であることについてのEmmaの幸せな確認。これら (P.&P.) と (E.) の両小説においてAustenは風景庭園の象徴的な価値を利用して、ある紳士の社会的地位がその人の家屋敷の外見で判断され得るということを物語っている。

Humphry Reptonの解釈では、庭園改造をする大地主たちの目的は、自分たちの住居のまわりの優雅な領地を拡大し、領民や小作人との博愛的な関係を促進し、召使いたちの間に快活さと慰めをゆきわたらせることであった。

しかしAustenは、そういう論理を越えて、その場所や所有者の真の実態を描き出している。ペンバリーの内外にも庭園にもElizabethはハーモニーと権力の落ち着いた拡大したイメージを見出す。伝統、財産、権力をしかるべく行使し、ロングボーンの重圧と混乱からの避難所を提供してくれられそうな人物としてダーシーの真価がわかって来る。ドンウェルアベイはジョージ・ナイトリーの率直で慎しみ深い威厳、気取らない誠実さのイメージである。そしてすぐその2～3頁あとにAustenはこの田

園の魅惑的で心が和むようなシーンのイギリスらしさをほめたたえ、ナイトリーの言う真のイギリスらしさに同感している。(E. p99)

(M.P.)には、これと正反対のイメージが見出される。ソートンレイシーの庭園改造を企てているヘンリー・クロフォードの提案の中である。

単なる紳士の住居から、それは賢明な改造によって、教養があり、趣味もよく、近代的礼儀作法と良い縁故関係を持つ人物の住居となるのです。こういうことすべてが深い感銘を与え、その家にその所有者を教区の大地主として評価させる雰囲気を与えます。

(M.P. p244)

諷刺的にもじられた象徴的論理とでも言えようか。ペンバリーとドンウエルアベイの描写を読んで、私たちが満足を感じる理由は、その所有権の質、(つまりこのような人々とその住んでいる場所との納得のいく一致)と風景の歴史的な性格(つまり何世紀の間その領地を所有することを許され、他人に尊敬される独自の責任感)である。これに反してヘンリー・クロフォードの庭園改造論はうすっぺらで芝居がかっている。単なるうわべだけででっち上げられ、効果をねらって押しつけられた理屈である。彼は適当な外づらで、牧師の妻になりたいという妹メアリーとの夢を実現させようとする。Austenは1790年代の状況の中で、庭園改造は新しい時代の目立った特色であったのか、それとも一過性の破壊的流行であったのかという疑問を投げかけている。当時もっとも活発だった議論の一つは、古い建物の運命にかかわったもので、以前には他愛のない好奇心に満ちた奇抜さに過ぎなかったゴシック趣味がどんどん膨れ上って、廃墟や宗教的建物を保存して改良し、それらを壮観で最新流行の住居に改造したいという積極的な熱望になった。歴史家たちや古物愛好家たちは、こういうことは「私物化による有害な盗み」だと抗議した。庭園改造は社会的慣習からのひとつの解放策となる可能性もあった。

(M.P.) のラッシュワース氏にとって、エリザベス朝に建てられたサザトンコートは、『牢獄—古い陰気な牢獄』であって、レプトンの腕前で近代的な外観を与えられるのを待っていた。(M.P. p53)

自分の家をアベイと呼ぶことは、歴史を重んずるようだが、現代について主張することにもなり得た。ノーサンガーアベイはCatherineの想像をかき立てるのにじゅうぶんゴシック的である。ティルニー将軍は自分が教養人であることをひけらかす。彼はゴシック様式の窓を保存したこと(改良の手を加えなかったこと)を熱心に自慢する。(N.A. p162) もっとも昔のガラスは無くなってしまっていたが。将軍は周囲の庭園のロマンティックな魅力を保存しようと努力してきた。客間は前の世代から引き続き適当な広さと変りない豪華さがある。しかし、アベイにはキャサリンをあざ笑うような反ゴシック的な面もある。彼女が到着した最初の晩に彼女はアベイの近代性に驚く。応接間は現代趣味豊かで大そう優雅である。古風な暖炉の代りにキャサリンは最近発明されたばかりのランフォードの小さな特許品を見出す。ティルニー将軍はひどく人当りの良い上品な紳士である。その持ち家であるノーサンガーアベイは家族の者たちに役立つように改造されたばかりである。アベイの内外の各種の'improvement'は奇抜なまでに複雑である。アベイとその敷地内を案内してもらって、キャサリンは圧倒され眼もくらみそうである。家庭菜園は広大で何エーカーにも及ぶ。温室群の広大さに、無邪気なキャサリンは、目を丸くする。そして彼女の気紛れな想像の中でこういう印象が幻想的に開花していく。ティルニー将軍の近代的で虚偽の壮麗趣味のおかげで、アベイは奇妙で気紛れな「陳列品」と化してしまっている。将軍の発明の才と見せたがり屋根性の産物である。戸外では、松林の改良とサクセッションハウスの細かい細工のために、将軍の庭園はイギリス中で比類のないものとなっている。(N.A.p178) 屋内では修道院時代の台所に、ひどく変わった改装が行なわれていて、それをAustenは大げさに皮肉って

いる。

the ancient kitchen of the convent, rich in the massy walls and smoke of former days, and in the stoves and hot closets of the present. The General's improving hand had not loitered here: every modern invention to facilitate the labour of the cooks, had been adopted within this, their spacious theatre; and, when the genius of others had failed, his own had often produced the perfection wanted. His endowments of this spot alone might at any time have placed him high among the benefactors of the convent.

(N. A. p183)

台所のむこうには、広々としていて、複雑な備品を具えた奥向きの機構があって、多数の使用人たちが住んでいる。将軍はこのことを自分の虚栄だと認めている。そのあと彼はいやに気取って、アベイの実用的な部分をキャサリンに案内して廻ろうと言い出す。彼にはミス・モーランドのような人（この時点では息子の嫁にもらおうと企んでいた）の心には目下の人々の労働が軽減されるような客室や衣食がいちばん良いことだと思われたから。ティルニー将軍の描写を読んでいくと、読者はベンジャミン・ランフォードを思い出す。（アベイの応接間にあった煙の出ない暖炉の発明者である）。ランフォードは真の科学者だったと言う人もいるが、発明狂の人物として手きびしく諷刺されもした。彼は台所のための機械仕掛けの道具類のアイデアを次から次へと発表し、ひどく長い発明物語を書いたことで知られている。ティルニー将軍はランフォードかぶれで新し物好きの、きざな成り上り者である。彼は召使たちの福祉に〈敬虔〉な関心を持っている。（これはAustenの奏でるもうひとつのランフォードかぶれの音楽だ）目下の人々、つまり召使たちの労働についてのティルニー将軍の殊勝げな意見のように、発明家の目論見は、見え

すいた、大げさで慈悲深い社会哲学の繁栄とともになされる。ランフォードの提案は悪名高いものが多かった。

①干からびたパンの薦め

貧乏人の食事のためには、パンは干からびている方がよい。噛む時間が長いので食べる楽しみが長くなる。

②貧困者のためのスープ接待所

貧民たちのための粥の調理法はあまりに水ばかり多いので、すぐさま「ランフォード伯爵のメタフィジカル・スープ」と命名されたという。当時イギリスの労働者たちは餓死寸前の生活をしていた。

ランフォードは自分こそ博愛主義の大思想家だと思い上って居り、ティルニー将軍は社会的道義心を持った人間だと自負している成り上り者である。二人の間には共通点がある。1816年にAustenが(N. A.)に改訂の筆を入れていた頃、ランフォードはまだほんの2年前に死んだばかりで、彼の記憶は人々の心に新しかった。彼のアイディアは批判的に再調査され、雑誌の中で広範囲に論じられたという。ランフォードの存命中、その著書は巡回図書館などで広く読まれ、高尚な哲学的取扱いと結びついて、大そう人気があったという。ランフォードのアイディアは教育ばかりでなく楽しみの源泉となることもあった。Austenもランフォードを読んで楽しんだこともあったであろう。

(S.) 中のSir Edward DenhamとCharlotte Heywoodのお茶の時間の会話を聞いてみよう。エドワード卿はヘイウッド嬢に、バターを塗らないトーストの胃壁に対する危険性について説明し、バターは胃壁を保護する力を持っているという。しかしエドワード卿は緑茶の効果？で胃がまいってしまっている（と自分で思い込んでいる）。彼は「私の右脇腹は数時間何の役にも立たないのです。」とこぼすと、シャーロットはそれに何の感情も示すことなしにランフォード派の科学を信じるように勧める。

「きっと、少し変に聞えるでしょう。でも敢えて申し上げますけど、右脇腹と緑茶の研究を科学的、徹底的に行なった人々にはそれが世界中でいちばん簡単なことだと解るでしょう。相互の反応の可能性も全部わかるでしょう。(S.p418)」

Charlotteはこの答えを冷やかに言い放つ。これは大げさで楽天的なランフォードの哲学に対するAustenの答なのであって、Austenは真面目くさってランフォードを嘲っている。ティルニー将軍が修道院の台所に加えた「創造、行為」は単なる機械的改良にすぎない。私たちは(S.)と(N.A.)の間の密接な関連に着目し、初期の小説との連続性のパターンに逆ることができる。

(S.)には他の小説のヒロインたちの豊富で情緒的な生活が欠けている。性格の発達や親族、人間関係の探求への集中もない。シャーロット・ヘイウッドはヒロインのレッテルを張られ、ヒロインの役をこなしている。またこの小説におけるAustenの観察点としての機能も担っている。読者は彼女の冷やかな用心深さと遠慮、エドワード卿が、けん命に彼女の気をひこうとしている時の、取り澄ました様子を面白いと感じる。しかしこのような態度や返答は、彼女がまるで当事者でないかのような印象を与える。彼女を私たちの同情あるいは愛情の範囲内に引き込もうとする努力もない。彼女が(N.A.)のヒロイン・キャサリン・モーランドと同様に思いやりもあり、感じの良い、生き生きとした人物に成長するような示唆もない。クララ・ブレトンはシャーロットよりも、中心からいっそう遠い場所に置かれている。他の登場人物たちは、ほとんど全部、社交的礼儀についての絶え間ない皮肉という形の滑稽な役割に限られている。Austenの他の作品には例がない。

Austenはサンディトンに登場人物たちを全部集めて、物語を展開させる。パーカー氏とダイアナパーカー、それにサー・エドワード・デナムは次々と現れて来るメロドラマ的ロマンティズムや浅薄な〈科学〉の

トピックスを腹話術的に代弁する。海岸の保養地は伝統主義者や反進歩主義者にとって新しい^{かねづる}金蔓のシンボルだった。彼らが'improve'した、ちっぽけな漁村とは異って、保養地には土地や海的生活への依存関係が無かった。

パーカー氏の雄弁さは海岸のガイドブックの修辭的宣伝（歌い文句）と海岸の医者仲間たちの売込の交渉からの借り物である。デナム令夫人に同意して、パーカー氏は需要と供給の法則、物価や賃貸料の水準についての、さらに詳しい解説へと深入りしてく。西インド諸島帰りの気前の良い家族の到着がサンディトンにインフレをもたらすこともないだろう。プロパティーオーナーとしてデナム令夫人は商人たちの繁栄からの利益に固執している。パーカー氏の支持は雄弁ではあるが、経験の裏づけが欠けている。発汗という物理的（むしろ生理的）現象について、アーサー・パーカー氏はひとつの投機を思い立つが、兄パーカー氏の理論も同じように仰々しくおぼつかない。科学的知識と社会的論理の誇示は改善された (improved) 社会の最近の成果、つまり社会の進歩のしるしであった。パーカー氏の妹たちの言う慈悲深さ (benevolence) は、'improvement' のジョークとも関連している。慈善事業組織的な慈善行為は摂政時代の特色のひとつだったからである。以前、慈善は友人や隣人たちの支持、地方の大地主の後援（つまり古い世界に残っている関係）の上に成り立っていた。しかし町々の発展につれて、この非公式なシステムは無くなりはじめ、社会的良心を持った人々、ことにメソジスト教徒と福音派の人々が、そのギャップを埋めはじめた。そしてそのすぐ後慈善事業が流行しはじめた。慈善団体に所属することは社会的な名声を高めたし、慈善活動は中流の人々の良心を安んじる便利な方法であった。1814年より後には貧富の差はいっそう著しくなった。パンの値段が上がり、失職した帰国兵士たち〔(P.) のウエントワース大佐と義兄のクロフト提督は半給支拂いを受けていた〕によってふくれ上った生活は貧困に傾いて行

った。

ダイアナ・パーカーについてのAustenの記述には憤りは感じられない。しかしその描写は情容赦なく正確である。これは当時の社交界の女性のタイプのひとつで、そういう人にとって慈善というものは人間の心の問題ではなく、一種の職業なのだ。つまり兄パーカー氏の躁病的熱狂と同じくらい強力だが親しみのうすい（人生の）活動領域である。遠方で慈善を実行しているダイアナ・パーカーの主張はイングランドじゅうにばら撒かれ、トロフィーのコレクションのように展示されている。これは流行の慈善事業で、デナム令夫人を基金寄付者の筆頭にすえるために書かれている。Austenはこの皮肉の要点を強調する必要を認めてはいないようである。

しかしその一方で、Austenは (P.) の中で真の慈善の手本ともいうべきものを示している。病気がちのスミス夫人 (Anneの学校友達) がウォーター・ゲイト・ビルディングズの近所で1~2軒の非常に貧乏な人々に、与えようと骨折っている援助がそれである。またAnne Elliotのスミス夫人訪問というエピソードにも詳しく書かれている。Anneの慈善は個人的な同情に富み、膝を交えて行われる。そういうところが父親ウオルター卿にとって著しく体面にかかわることなどである。

詳細な社会的な基準から見ると、(S.) はAusten小説のうちで最も集中的で中味が濃い。諷刺とジョークがふんだんに使われている。Austenは数多くの文体をからかい半分に真似て、(病気が進行中だった作家にとっては、なまなかのことはなかったであろう) 各種の社交的人物を出現させることによって自分の技巧を楽しんでいる。ジョークは自己戯画化の域にまで達している。

(M.P.) の芸術的業績のうちのひとつはサザトンコート訪問と「恋人たちの誓い」(Lovers' Vows) のリハーサルが、この小説の後の部分で起る出来事と人間関係の行動様式を予示していることだと言われている。

(S.) のはじめに起る「間違い続き」においてAustenは (M.P.) と同じ手法を用いている。パーカー氏の馬車が小道で転倒し、彼は思いがけなく^{くろおし}踝を捻挫してしまう。またウィリンデンの外科医たちのためにパーカー氏が計画したハイロガン狩りは、楽天的な頑固さをもって続行されるが、くい違いの大混乱に終わってしまう。B.C.Southamによれば、このエピソードは (S.) の将来を予示する象徴的事件である。

(未完のため結末は不明であるが) (S.) はイギリス摂政時代の南海泡沫事件 (South Sea Bubble) である。これは

1711年英国でスペイン領南アメリカの貿易独占権を得て設立された南海会社 (South Sea Company) が国債の引受けを条件に大宣伝をして投機熱をあおり、1720年にいたって100ポンドの株が1時1000ポンドにもなったが、事業の不成績が暴露されて、株が大暴落し、多くの破産者を出すことになった事件である。

Austenは (S.) のはじめの部分の戯作的喜劇で、サンディトンの運命を予言しようとしていることは既に述べた。Austen自身がそれ以前の小説に用いた文学的手法とは概して反対の手法を用いて居り、自身の素養に対するジョークであるとも考えられる。この諷刺のあてつけ的な雰囲気とともに、Austenはまた、「時代の精神」(つまりimprovement)の風潮がどんなにサンディトン村を吹き荒れているかを描いている。漁夫たちの小屋は今ではすっかり小ざれいになり、古い農家には優雅な白衣を着た婦人たちが働き、図書や折りたたみ式キャンプ用椅子の備えもある。パン屋の店では(今では)天井からハーブの音楽が聞える。靴屋のウィンドウにはブルーシューズとかナンキンブーツとかが、さも文化的だといわぬばかりに飾られている。(S.p383)

'Improvement'のおかげで、パーカー家の人々は、昔からの小ぢんまりとした安楽さ(パーカー氏の先祖代々の家)から出て、丘の上の'Modern Sanditon'へと引越さなくてはならない。その新しい住居はトラファルガ

ー・ハウスと呼ばれ、明かるい優雅な建物で、まわりには植樹したばかりの植込みもある。(S. p384)パーカー氏は、ここでは大きな危険なしに嵐の大きさを味わうことが出来ると言って自慢する。昔風で遠慮ぎみな、ロマンティックな海の味わいと比較してみても、トラファルガーハウスに軍配はあがらない。明かるく優雅なトラファルガーハウスはパーカー氏の先祖伝来の家の向かい側にある。その家は (E.) に出てくるドンウェルアベイと同様に、囲いもしっかり廻らされ、植込も立派で、庭園や果樹園や牧場も豊かで、そのような住いの最高の飾り付けを備えている。(S. p379) その居心地の良い先祖伝来の家から、パーカー夫人は引越したがらない。とは言っても、トラファルガーハウスからの眺めは素晴らしい。シャーロット・ヘイウッドが自分の部屋の窓から、サンディトンの村と海をはじめ眺めた時、その印象は現実的で、しかも生々しい。エドワード・テナム卿によれば、海と海岸とは感受性のある人々をわくわくさせるものである。(S. p396)

しかし、そういう活力と魅力はサンディトンの発展の産物である。出来かけ (建築中) の建物、風にゆれるリネン類、家々の屋根、日光にきらめく海面… (S. p384)

シャーロット・ヘイウッドはサンディトンを若い経験不足な眼で眺め、すぐ興味をそそられ、面白がる。この部分は 'improvement' という現象への Austen 自身の敏感さを伝えている。しかしサンディトンの上を吹く楽しく華やかな「時代精神」の嵐は、たゆみなく続く (精神) という他の一面も持っている。それがシャーロット・ヘイウッドには、パーカー姉妹の熱病だと思える。サンディトンにはその土地特有の、うつろい易い美しさがあり、一時的な魅力もある。シャーロットはパーカー家の人々の活動の原動力は何であるのか、頭をしぼって考え出そうと試み、その結果、彼らの熱狂的努力のすべて (設計者としてのパーカー氏の努力、混乱状態、それからの回復、積極的な改革、役に立ちたいという熱望の

すべて)は、あり余るエネルギーと何の職業にもついていないことに原因があるという結論に達する。(もっとも、当時のイギリスのジェントリー階級の人々は、職業についていないのが当たり前だった。)Austenはここでジェントリーの職業病とも言うべきものをつきとめることになる。富裕で暇もあり、それでいて彼らには、熱中すべき仕事がない。こうして快楽の追求とサンディトン('improvement'…海岸保養地の造成)の出現となる。パーカー家の人々は変革の発起人で、自分たちの荒々しく片意地なエネルギーに中毒している。その原因は彼ら自身の精神よりもむしろ彼らの時代[Regency England (1811~1820)]にあった。Austenの描いた「たゆみない活動精神」はその不確実な情勢が、登場人物たちにも、手書き(未完)原稿に書かれた物語のテンポにも、変遷の激しさにも、極端な文体にも感じられる。

Austenを本質的な18世紀作家と評した歴史評論家がいる。また、保守的新古典主義者とか伝統主義作家とか、いろいろに評されている。たしかにAustenの道德観とその表現形式には18世紀中葉の本質があり、18世紀の上品さの興味ある言いまわしが、ヘイウッド嬢の取り澄ました様子を物語っている。この上品さはまた(S.)の言葉遣いや譬えの中にまで及んでいる。そして強引で勝手な登場人物たちのエネルギーと表現に対して、微妙で女性らしい遠慮、文体的抑制の効果を發揮している。

Austenの個人的な愛着と同情はヘイウッド氏(田舎の大へん着着いた、静かで注意深い暮らし方)に集まっている。それは(習慣から)快適だと表現された暮らし方で、Austenがもっとも書き易い状況であった。(Austenは1809年にチョートンに到着くと、すぐその後創造力を取戻したという。)しかし作家としてのAustenの「連続的勝利」は、彼女の新しい経験に対する開放的な率直さと、その表現のために新しい方法をすすんで探求しようとする態度にある。

Austenは過去に対する郷愁を抱いている。彼女自身も認めているよう

に 'improvement' (過去を^{おび}脅かす物) の魅力への反応である。(S.) は摂政時代の新しい驚異が人を楽しませる力に対する、ひとつの告白でもある。また、新鮮さを失わない Austen の器用さ (発明的才能) の証明でもある。

参考文献

オーステンの作品は

Oxford Illustrated Jane Austen Edited by R.W.Chapman

(Oxford University Press, 1987)

を使用。

Dictionary of National Biography

Austen-Leigh, J.E., A Memoir of Jane Austen

(Harmondsworth, 1965)

Butler, Marilyn, Jane Austen and the War of Ideas (Oxford, 1975)

Duckworth, Alistair M., The Improvement of the Estate: A Study of Jane Austen's Novels (Baltimore, 1971)

Lascelles, Mary, Jane Austen and her Art (London, 1963)

Mudrick, Marvin, Jane Austen; Irony as Defense and Discovery (Princeton, 1952)

Southam, B.C., ed., Jane Austen; The Critical Heritage (London, 1968)

Odmark, John, An Understanding of Jane Austen's Novels (Oxford, 1981)

Laski, Marghanita, Jane Austen and her World (London, 1977)